

生薬栽培先進地を視察して

報告者 水 木 壽 保

- 視察先
 - ・富山県薬用植物指導センター
 - ・富山県薬草生産組合

● 視察日程 平成26年10月20日～22日

● 視察参加者 鈴木一彦、皆川鉄也、芦崎達美、水木壽保

● 平成26年10月21日に町で取り組んでいる生薬栽培の研修を先進地である富山県の薬事研究所付設薬用植物指導センター、富山薬草生産組合を視察し、その現状とノウハウを学ぶべく研修した。

午前中の富山県薬用植物指導センターは全国で唯一の薬事に関する公設試験研究機関であり、大江勇所長からは薬用植物の栽培普及を図り、あわせて山村振興の一助とするため、栽培法及び調製加工法の確立、種苗の供給等について

おいて「和漢薬の原料産地化に積極的に取り組む富山県産薬用植物のブランド化を更に進めるべき」との議員提案があり、県当局からは耕作放棄地活用対策も含めこの提案を支援・協力したいとの回答があり、有志により指導センターを視察し、音川地区の土地気象条件、土質等がトウキ、シヤクヤクの栽培に適していることが判明した。



薬用植物の栽培状況や普及について説明をうけました。

同年の秋にはシヤクヤク苗1千本を5アールに試験栽培、翌年はトウキの苗も導入し、6個人、1企業で富山薬用植物栽培技術研究会を設立した。



シヤクヤク園・栽培圃場

職員から説明を受けています



ての業務概要が説明された。

昔から「越中富山の薬」と聞いていたので、古い時代から生薬栽培が行なわれていると思っていたが長野県が発祥の地であるとのこと。当センターは昭和42年薬草園として設置され、後に富山県薬事研究所からの付設機関として独立し、植物の成分含量に差があること等から、収量と品質

会員は幼い頃から漢方薬の世界になり、又家族の健康を願うシニア、シルバー世代であり、企業も資源リサイクルを本業としてついでチゴ、トマトのハウス栽培を行い、薬用植物生産にも意欲を示していた。

栽培を通して様々な経験を積み、平成25年度に富山薬草生産組合に改称、更なる栽培技術の向上と生産振興には富山市からも薬用植物生産推進事業が予算化されるなど普及を後押ししてくれた。

この事業は新規栽培面積又は前年より拡大した面積に対しては10アール当たり3万円、前年度と同面積は1万円の補助金が交付されるものである。

今後の課題はトウキの生産コスト低減に向けて、ポットでの自家育苗に挑戦中である、収穫対策は掘り取り機が必要で振動掘り取り機等の購入も検討中である。やはり機械化による作業体系の構築が必要

の両面で優れた系統や栽培上
有用な系統を育種し新しい品
種の育成にも努め、4・3ヘ
クタールの敷地には栽培圃場
2・9ヘクタールを有し主に
トウキ、シヤクヤクの栽培が
奨励されている。

肝心の販売についてはまだ
行なわれていなかったため残
念であったが、本来薬草がブ
ームになったのではなく、農業
が衰退しているから注目され
ているのではないかとこの事に
やけに説得力があったような
気がする。また、富山県の取
り組みについて説明、薬の富
山として300年を超える歴
史と伝統を持つ県、製薬企業
や関連企業を擁する利を活か
して、近年薬用作物の産地確
立に力を入れている。

中でもシヤクヤクの生産量
の増加はめざましく、今年
前年の3倍以上の9千6百キ
ロが見込まれている。背景に
あるのは、関係機関の強力な

だ。今後の展望は薬事法によ
る様々な規制もあると思うが、
生根出荷だけでなく、いづれ
は「洗浄・乾燥・粉碎」など
の二次加工を行ないグラム単
位で製薬会社などに販売した
いとのことであった。まだ日
が浅く収益等についての資料
が無く心残りもあったが、シ
ヤクヤクの一株当たりの収穫
量が2キロ以上あり1・5キ
ロがあれば採算とれるという
ことであった。

時間を延長しての交流会を
行ない有意義な研修であった。
組合員の今後益々の活躍と富
山薬草生産組合のご隆盛を願
い報告とする。



富山県薬用植物指導センター